



教育者 クラーク

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

米国マサチューセッツ農科大学の学長だったウィリアム・スミス・クラークは、札幌農学校（現北海道大学）開設のため、1年間の休暇をとり1876年7月、教頭として赴任しました。翌年4月まで植物学などを教える一方、生活指導に当たり、キリスト教の伝導にも努めます。「ビー・ジェントルマン（紳士たれ）」という人間教育は、わずか9カ月の滞在にもかかわらず、学生たちに大きな影響を与えました。そして遺訓とされる「ボーイズ・ビー・アンビシャス」は当初「青年よ大志を抱け」と訳されていましたが、次第に「少年よ大志を抱け」とも言われ、前途ある青少年を励ます名言となっています。

北大 モデルはよく似た外国人

北海道帝国大学の創基50周年記念事業として、札幌同窓会が発案したのがクラークの胸像建設です。1925年6月にクラーク先生胸像建立委員会を設立し、委員長には札幌同窓会長で同大学教授の南鷹次郎が就任。7月から卒業生、教職員、学生らを対象に募金活動を始めます。

設計、制作は東京美術学校（現東京芸術大学）の校長正木直彦に依頼しました。正木は胸像づくりを同校卒業生の田嶋碩朗に託し、台座は同校が担うことを決めます。

田嶋にとって、骨格の違う外国人を表現するのは容易ではありませんでした。小樽新聞(1926年5月14日)に語った苦心談によると、写真1枚では心もとないの

で、似た顔を求め東京や横浜を歩き回ります。

するとよく似た外国人に出会いました。その人は早稲田大学教授のポーランド人。事情を話しモデルを依頼すると、快く応じてくれました。「その時は飛立つばかりにうれしかった」と述べています。

試行錯誤の末「原型の雛形が出来上がった日、^{そぞう}塑造に向かって立たれた大島（正健）先生は『生きていらっしゃるようだ』とおっしゃって姿勢を正され三歩さがって深々と拝礼された由で、この時の感激をのちのちまで父が語っていた」と長男行平は述懐しています。

大島はクラークの教えを受けた1期生で、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」を初めて世間に紹介した教育者です。田嶋はこれ以上ない「お墨付き」を得たことが、終生忘れられなかったのでしょうか。



戦後再建された北大の胸像

一方、台座は見落とされがちですが、かなり工夫が凝らされています。上部にクラーク直筆の名前を彫り、その下に「BOYS, BE AMBITIOUS」と表記、さらには植物研究を始めるきっかけとなったオオオニバス（スイレン科）を図案化しました。

これはクラークの伝記を読みたいという正木の要望に応え、2期生で北海道帝国大学教授の宮部金吾が送った小伝をよく研究した結果でした。小伝は宮部が1922年2月、小樽新聞に6回連載したもので、その中にクラークが満開の大きなオオオニバスを見て感銘した話が出ています。

除幕式は1926年5月14日、大学創基50周年記念式と併せ盛大に行われ、胸像制作の現場に立ち会った大島が祝辞を述べました。「参列したもの無慮三千、さすがに広き胸像の周囲も十重二十重の人垣を作った」と北海道帝国大学新聞（1926年6月17日）は伝えています。

その後、クラーク像は戦前の教科書「小学国語読本」に登場。英語で「少年よ、大志を抱け」と記してあることを子どもたちが知り、ひいては全国民に広まります。



台座に刻まれた（上から）クラークのサイン、遺訓、オオオニバスの絵

第2次大戦の金属回収の際には、有名になった胸像を隠匿しようとする連中が現れました。台座から分離後、保管されていた像を盗み出すため1943年6月25日夜、学生数人が中央講堂に忍び込みます。

だが、あまりの重さに搬送できず、像は元の台座に据えられました。それを知らない学生は像を見て「この代用品は良くできている。本物そっくりだ」と言ったそうです。

落ちまで付いたこの話は、彼らと同期生だった後の北大教授が1966年の北海道大学新聞に執筆、その後「北大百年史」などにも紹介されました。しかし、腑に落ちないのは、重くて持ち出せないものをどうやって台座に上げたのかです。

この疑問を解いてくれたのは、2015年3月5日の北海道新聞でした。「北海道と戦争」という連載記事によれば、学生たちは運搬用のリヤカーにすら載せられませんでした。

当事者はすでに亡くなっていますが生前、同期生が同窓会で会った際、どこに隠したか尋ねたところ「重くて持ち出せなくて、（中央講堂の）物置かどこかにぶち込んでおいたんだ」と答えたそうです。

こうした学生たちの熱い思いが胸像の復活を早めました。1947年11月、学生有志らがクラーク先生胸像再建期成会を設立。田嶋は前年6月に他界していましたが、札幌独立教会に保存されていた石膏原型を使い鑄造復元することが決まります。

再建された銅像の除幕式は1948年10月8日に行われ、宮部の孫娘が幕を引きました。供出から復元まで5年、戦後の物資不足の中、驚くほどの短い期間でクラークはよみがえったのです。

羊ヶ丘展望台 窮余の一策が人気呼ぶ

北海道大学のクラーク像はかつて札幌を代表する観光資源でした。構内には観光バスが押し寄せ、像の前は記念写真を撮る修学旅行生らでごった返していました。学術研究の支障になると判断した大学は1973年、観光バスの立ち入り禁止に踏み切ります。

日本交通公社が調べたところ、銅像前で団体客が記念撮影した写真の売り上げは年平均3千万円でした。1人100円の収入とすると、30万人分にも相当します。

観光バスの締め出しにより、業界は大きなダメージを受けました。

そこで浮上した打開策が、羊ヶ丘展望台に新たなクラーク像を建設することでした。札幌観光協会が中心となり、北大創基100年、米国建国200年となる1976年の記念事業に位置付けます。

だが、これに違和感を抱く人も少なくありませんでした。この年の北海道新聞には「なりふり構わぬ観光客誘致 クラーク博士の銅像建立に思う」という北大生の投稿が載ります。「いったいどういう根拠と資格があって貴会（札幌観光協会）が北大とは縁もゆかりもない羊ヶ丘に博士の銅像を建てたり歌を作るのでしょうか」と問い、「観光客誘致のためには、なりふり構わず、意味のない観光資源をつくり出そうとする貴会の姿勢に疑問を感じます」と訴えました。

こうした声に同協会常務理事の光野英親が、新クラーク像建設記念の冊子で「羊ヶ丘は北大とは縁もゆかりもない土地ではあるが、ここは札幌観光協会の経営するところ」と独自性を主張し、「建設については当然、北大当局に事情を説明して了解は受けた」と述べています。

そして「来訪する観光客にクラーク博士の銅像を紹介することは、その精神の伝承であり、讃美することは私たちの重大な責務」と建設の意義にも言及しています。

新しいクラーク像は羊の放牧地を背に、風になびくフロックコートを羽織って立ち、右腕を横にまっすぐ伸ばし、その先を指さしています。像の両脇は広い階



団体の記念撮影も容易な羊ヶ丘展望台の立像

段状のスペースにし、団体客の記念撮影を容易にしました。

制作者の坂垣道^{たんどう}は同じ冊子で『丘の上のクラーク』と作品のテーマを決めたが、これは私のモチーフであって、銅像としてすえられた以上、それは見る人びと、それぞれの想念の世界で自由に皆さんのクラーク博士を考えていただきたい」と語っています。

除幕式が行われた1976年4月16日は、クラークが札幌をたった記念の日。クラーク像を取り囲んだ羊ヶ丘小の児童200人が、この日のために作られた「クラーク讃歌」を北大交響楽団の演奏で高らかに歌い上げました。

当日の様子を報じた北海道新聞（1976年4月17日）は「団体観光客を締め出している『本家、の北大に代わって、羊とポプラ並木、クラーク像を売り物に観光客を呼び込もうとの『観光商法。だが、早くも本州から新たに年間五万人の観光客誘致話が決まるなど図に当たったよう』と書いています。

今や羊ヶ丘は札幌観光に欠かせない場所となり、クラーク像と言えば、北大の胸像ではなく、躍動感のある羊ヶ丘の立像を思い浮かべる人がほとんどです。

北広島 創作欲かき立てた縁

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」は帰国するクラークが見送りに来た学生たちに贈った言葉だといわれています。その別離の地が島松駅通所^{ていしよ}（現北広島市島松）でした。

そこに記念碑を建てようと呼びかけたのは、北海道帝国大学のキリスト教青年会の会員たちです。1934年6月、現地をよく知る1期生で元総長の佐藤昌介や2期生で名誉教授の宮部金吾をはじめ、教員、学生ら約40人が島松へ視察に赴きます。

しかし、かつて明治天皇がこの地に立ち寄ったため、周辺一帯が神聖化され、適当な建設地が見つかりませんでした。道路から奥まった場所に予定地の木標を建てますがその後、運動は立ち消えとなります。

戦後、宮部は北大学長の伊藤誠哉らとともに記念碑建立に取り組みます。当時、北大ではクラークの胸像を1948年10月に再建する活動が先行していました。これに刺激を受け、運動は碑の建設のみならず、青少年

への奨学金支給を目指すものへと発展、組織名はクラーク奨学会となり、宮部が発起人代表を務めます。

制作したのは岩見沢生まれで札幌育ちの山内壮夫^{たけお}です。山内は「戦中戦後おさえつけられていた制作慾^{よく}の爆発と、記念碑建立のテーマに感激して無我夢中で取り組んだ」と回顧しています。

現地視察した島松川の橋のたもと、大正時代の夏、中学生だった山内が兄とその友人と3人で、道南を目指し徒歩旅行した折、小休止した思い出の地でした。

この場所で兄は、重い荷物で遅れがちな山内を励ますため、これから上る坂道を指さし「ボーイズ・ビー・アンビシャス」と叫びます。かつてクラークがここで発した言葉だと悟った山内は、力を得てまた歩き出したのです。「不思議なこのつながりは私の創作慾を一層燃えたたせる因縁となった」と打ち明けています。

制作にあたり、山内の根底にあったのは「クラーク精神は北海道のパルテノン」という考えでした。パルテノンはギリシャ・アテネの守護神をまつる神殿です。そこで、発案したのが御影石^{みかげ}づくりのパルテノン式円柱でした。



別離の地、島松にある記念碑



記念碑の上方に掲げられたレリーフ

構想を宮部に説明した際、クラークの耳は素晴らしい形で、偉人の風格を持っているので、耳には十分注意して作ってほしいと言われました。それを意識してか、完成したレリーフは横顔で、耳の形がよく分かる構図になっています。

高さ7尺の円柱の上方にレリーフを取り付け、その下に「BOYS BE AMBITIOUS」と横書きし、さらには下方には伊藤の書による「青年よ大志を懐け」が縦書きで記されています。

除幕式はクラークが旅立った日に合わせ1951年4月16日に行われ、新たな学長、島善鄰^{しまよしちか}の孫娘が幕を下ろしました。しかし、宮部は1カ月前の3月16日に90歳でこの世を去り、式典を見届けることはできませんでした。

現在、この地にクラークの馬上像を建設する運動が進んでいます。提唱者は「クラーク博士別れの地・久蔵の里普及促進会」。北大創立150周年、クラーク博士生誕200年となる2026年8月の完成を目指し寄付を募っています。

(敬称略、肩書は当時のもの)

<参考文献>

- ・岩沢健蔵「北大歴史散歩」北海道大学出版会、1986年
- ・田嶋行平「クラーク像と父」札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫21 札幌の彫刻』北海道新聞社、1982年
- ・クラーク先生胸像再建期成会編「我がクラーク先生」クラーク先生胸像再建期成会、1948年
- ・阿部要介編「好きです。さっぽろ 札幌観光協会50年記念誌」札幌観光協会50年記念誌刊行委員会、1986年
- ・札幌観光協会監修「クラークのすべて」W. S. クラーク博士顕彰会、1976年
- ・山内壮夫「クラーク街道」竹田巖道編『美しく豊かな北海道』北海道PRセンター、1968年